

ID No.	3011
研究課題名	核内増殖型RNAウイルスのインフラマゾーム誘導及び抑制機構の解析
研究代表者	本田 知之 (大阪大学・准教授)
研究組織 受入教員 研究分担者	一戸 猛志 (東京大学医科学研究所・准教授)
研究報告 宿主細胞は、ウイルス感染に際して自然免疫を賦活化させ、抗ウイルス防御を行なう。その最初のシグナルとなるのが、ウイルス核酸の宿主核酸センサーによる検知である。これまでに、ウイルスDNAやRNAを検知する多くの核酸センサーが報告されてきた。しかし、その多くは細胞質に局在する分子であり、核内のウイルス核酸検知については解析が遅れている。特に、核内ウイルスRNAの検知に関しては、未だ全く報告がない。本研究では、核内増殖型RNAウイルスとしてボルナウイルスやインフルエンザウイルスを用いて、核内へのウイルス感染後のシグナル経路を、自然免疫経路（特にインフラマゾーム）に着目して解析する。 本年度は、ボルナウイルス感染における特徴的な感染現象であるウイルス配列の内在化と自然免疫との関連を検討した。一戸准教授の指導のもと、インフラマゾーム再構築系の習得ならびに内在性ボルナウイルスエレメントがインフラマゾーム、IFNシグナル系を制御するかのプレリミナリーな検討を行った。本年度後半には、申請者がスクリーニング中のIFNシグナルを惹起するような化合物が、インフルエンザウイルスワクチンのアジュバントとして使えるかについて、共同研究計画の立案を行った。	